



研究用試薬

# ヒストファイン

第一抗体  
抗グリピカン3モノクローナル抗体(ヒストステイナー用)

(動物種：マウス)

包装：60テスト(12mL)      Code：718021

製造販売元

**株式会社ニチレイバイオサイエンス**

〒104-8402

東京都中央区築地6-19-20

TEL.03(3248)2208 FAX.03(3248)2243

- 本品は、自動染色装置ヒストステイナー用の試薬 第一抗体である。
- 特異性および抗原分布：ヒトグリピカン3(Glypican-3：GPC3)と特異的に反応する。グリコシルフォスファチジルイノシトール(GPI)アンカーにより細胞膜に結合している約60kDaの糖タンパク質である。細胞の細胞質(発現量により弱～強染色となる)および細胞膜に反応が見られる。正常では、胎児期の肝細胞にみられるが成人肝細胞では発現はみられない。腫瘍では、肝細胞癌(Hepatocellular carcinoma：HCC)、肝芽腫、メラノーマ、精巣胚細胞性癌、ウィルムス腫瘍等に発現がみられる。特に、肝硬変や形成異常小結節や癌化した肝細胞腺腫(hepatic adenoma：HA)のような限局病変肝よりもHCC組織に高い発現がみられる。肝臓癌の腫瘍マーカーとして有用である。
- クローン名：1G12
- 抗体のサブクラス：IgG1
- 免疫原：コアタンパクの70アミノ酸
- 製法：マウスの腹水から得ている。

## 1. 内容

第一抗体・・・抗グリピカン3モノクローナル抗体(動物種：マウス)。

液状。

ウシ血清アルブミン(BSA)と、0.1%アジ化ナトリウムを含むリン酸緩衝生理食塩水(PBS)中にて、即時使用可能な抗体濃度に希釈済み。

1バイアル中に12mLを含む。

## 2. 使用目的

組織・細胞中のグリピカン3抗原の染色。

## 3. 切片の準備

前処理(抗原賦活化)としてヒストファイン 抗原賦活性化液 pH9 (Code:415201 または Code:415211)を用いたオートクレーブ処理が必要である(裏面参照)。

■参考：組織の固定状況等により抗原賦活性化液 pH9(Code：415201 または Code：415211)の代わりに10mMクエン酸緩衝液(pH6.0)を用いたオートクレーブ処理をすることで、より良好な染色結果が得られる場合がある(裏面の■参考参照)。

## 4. 使用方法

パラフィン包埋切片の免疫組織化学および免疫細胞化学染色に使用できる第一抗体である。

1) 他の試薬とともに試薬ラック(ヒストステイナー用)にセットし、染色を開始する。

2) 染色終了後、すみやかに2-8℃に保存する。

## 5. 染色方法の設定

反応時間を30分間とする。

## 6. 貯法

2-8℃保存。

## 7. 使用上又は取扱上の注意

ヒト由来の検体は、取扱者に感染をひき起こす危険性がある。従って、適切な取扱および廃棄法を用いるとともに、この免疫組織(細胞)化学染色法を施行するに際し、関連技術および操作法に充分習熟しておかなければならない。

試薬バーコードラベルを使用する場合は、自動染色装置ヒストステイナーのプログラムにバーコードラベル情報を入力する必要がある。本製品が未登録の場合は、下記データを入力(漢字のみ全角、他半角入力)し、登録すること。

専用ボトルに貼付されているバーコードラベル内の情報

試薬名	抗グリピカン3モノクローナル抗体
試薬略称(10文字)	GPC3-MM
バーコード	GPC3-MM
時間(分)	30

## 8. 主要文献

- (1) Filmus J., et al : J Clin Invest. 108 : 197-501, 2005
- (2) Yamauchi N, et al : Mod Pathol. 18 : 1591-1598, 2005
- (3) Wang XY, et al : Hum Pathol. 37(11) : 1435-1441, 2006
- (4) Libbrecht L., et al : Am J Surg Pathol. 30(11) : 1405-1411, 2006
- (5) Kandil D., et al : CANCER 111(5) : 316-322, 2007
- (6) Di Tommaso L., et al : HEPATOLOGY 45 : 725-734, 2007
- (7) Caston Wanda M. P., et al : Am J Surg Pathol. 32 : 433-444, 2008
- (8) Zynger DL., et al : Hum Pathol. 39(2) : 224-230, 2008
- (9) Anatelli F., et al : Am J Surg Pathol. 130 : 219-223, 2008
- (10) Shafizadeh N., et al: Mod Pathol. 21(8) : 1011-1018, 2008
- (11) Ligato S., et al: Mod Pathol. 21(5) : 626-631, 2008

■ 研究用としてのみ使用すること。

### ■ 切片の準備

1. 50℃で十分に湯伸ばしした切片 (3-4 $\mu$ m厚) をシランなどのコーティングスライド上に貼り付け、37℃の恒温器内で16時間以上乾燥させる。
2. 脱パラフィン → 親水化 → PBS
3. 前処理(抗原賦活化): オートクレーブ処理
  - ① 緩衝液(下記記載)を耐熱性バットに入れ、切片を浸す。
  - ② バットに蓋をする。蓋が取れないように輪ゴムでとめる。
  - ③ 120℃、20分間オートクレーブ処理する。
  - ④ 圧力が十分下がった後、バットごと切片を取り出す。
  - ⑤ バットの蓋をはずし、バットごと切片を常温に20分間以上放置し、ゆっくり熱を冷ます。※オートクレーブ処理後は、バットおよび緩衝液等が高温になっている。これらを取り扱う際は、手袋等を使用し火傷に注意する。
  - ⑥ スライドを緩衝液から取り出し、PBSまたはバッファーでよくすすぐ(3分間ずつ容器を2度かえるか、または洗浄ビンを使用する)。

・ 抗原賦活化液pH9の作り方

- ・ Code : 415201 抗原賦活化液pH9 (調製済)は、そのまま用いる。
- ・ Code : 415211 抗原賦活化液pH9 (10倍濃縮)は、精製水で10倍希釈する。

■ 参考 : 10mMクエン酸緩衝液(pH6.0)オートクレーブ処理を用いる場合(おもて面の■参考参照)

・ 10mM クエン酸緩衝液 (pH6.0) の作り方

A液9mL+B液41mL+精製水450mL (用時調製)

- A液 : 0.1M クエン酸水溶液 : 常温で保存可能  
クエン酸一水和物 (C<sub>6</sub>H<sub>8</sub>O<sub>7</sub> · H<sub>2</sub>O) 2.1g / 精製水 100mL
- B液 : 0.1M クエン酸ナトリウム水溶液 : 常温で保存可能  
クエン酸三ナトリウム二水和物 (C<sub>6</sub>H<sub>5</sub>O<sub>7</sub>Na<sub>3</sub> · 2H<sub>2</sub>O) 14.7g / 精製水 500mL
- ここから必要な時に調製する。